

平年収量が増減する都道府県の生産事情 (詳細版)

大臣官房統計部

平成 2 7 年 3 月 1 8 日

農林水産省

北 海 道

1 品種構成の動向

「きらら397」等が減少し「ななつぼし」、
「ゆめぴりか」等が増加する傾向にある。

2 栽培技術等の動向

近年、中苗移植等から収量水準の高い成苗
移植への割合が約7割を占め、安定した栽培
が確立され、10 a 当たり玄米重は増加する傾
向にある。

3 気象の推移及び最近の作柄等

近年は、登熟期間の平均気温が高めに推移
している。

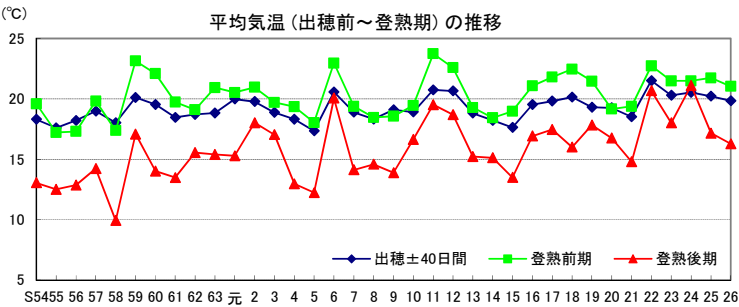
また、近年、天候等に恵まれ、作況指数は
高い傾向となっている。

＜最近の作柄（平成20年産以降）＞

年次	全 も み 数	登 熟	被 害	（作 最 況 終 指 ） 数
20	◎	—	◎	106
21	○	××	××	89
22	××	◎	×	98
23	××	◎	○	105
24	○	—	◎	107
25	×	◎	○	105
26	○	—	◎	107

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み
×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）
ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み
×：やや多い ××：多い

＜平均気温の推移＞



4 収量水準の動向

収量水準の高い「ななつぼし」、「ゆめぴり
か」等の作付面積割合が増加していることに加
え、成苗移植等高収量で安定的に生産する栽培
技術が普及していること及び近年の登熟期間に
おける平均気温の安定から、収量水準は上昇傾
向にある。

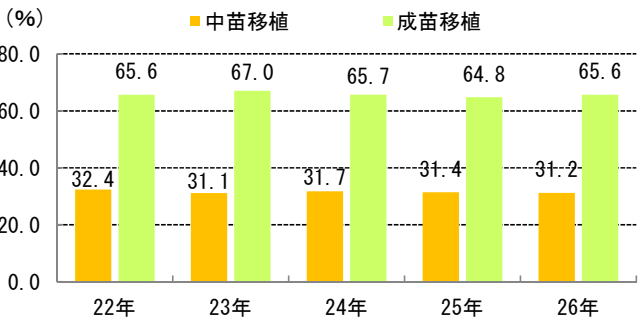
＜品種別作付面積割合の動向＞

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H22	23	24	25	26	27 (見込)
ななつぼし	575	38.4	38.6	40.8	41.2	41.8	44.2
きらら397	591	28.2	27.4	25.2	22.1	19.9	18.9
ゆめぴりか	561	4.8	8.7	9.7	11.6	14.2	14.9
ほしのゆめ	561	9.8	7.6	6.5	4.6	3.2	2.5
おぼろづき	549	5.1	3.8	4.8	4.8	4.1	3.6
ふっくりんこ	560	4.3	4.7	5.7	6.0	6.3	6.9
*はくちょうもち	553	3.6	2.8	2.5	2.5	2.6	2.2
*きたゆきもち	553	0.4	1.3	1.6	1.7	1.7	1.8
単収試算値の対前年差 (kg)		△ 0.6 △ 0.4 0.0					

※ 1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 平成27年見込は農業団体等の情報から推計した。

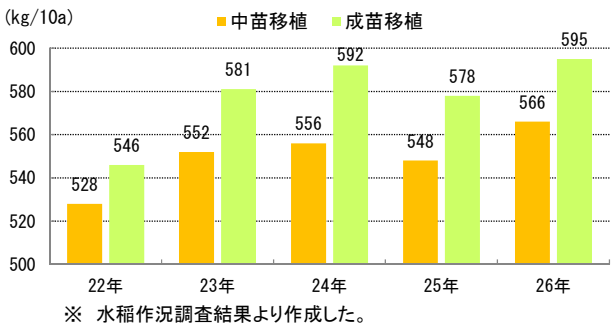
＜栽培技術等の動向＞

移植方法別作付面積割合の動向



※ 過去の実績を基に推計した結果である。

移植方法別10 a 当たり玄米重の推移



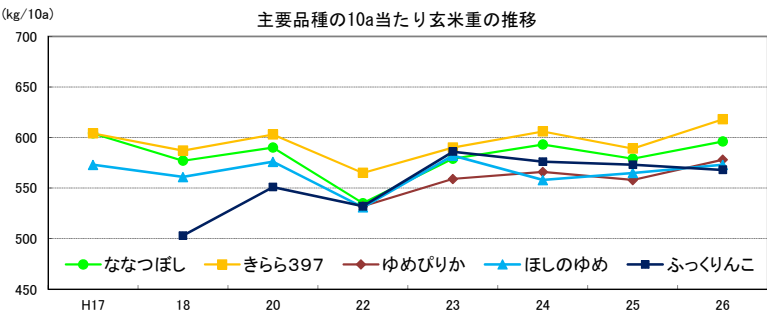
※ 水稻作況調査結果より作成した。

○ 10 a 当たり収量水準

単位：kg

	平成23～25年 3 か 年 平 均	平成24～26年 3 か 年 平 均	前 年 差
10 a 当たり玄米重	558	560	2

注：中苗・成苗移植の面積割合にそれぞれの10 a 当たり玄米重を
乗じて、算出した。



※ 水稻作況調査結果より作成し、異常年は除外した。

山形県

1 品種構成の動向

主力品種の「はえぬき」を中心とし、近年、「ひとめぼれ」、「コシヒカリ」等が減少する一方、「つや姫」が増加する傾向にある。

＜品種別作付面積割合の動向＞

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H22	23	24	25	26	27 (見込)
はえぬき	624	59.3	60.4	58.6	60.1	60.4	60.0
つや姫	599	3.4	4.7	9.3	9.6	9.8	10.9
ひとめぼれ	581	13.2	12.4	11.3	10.8	10.1	9.8
コシヒカリ	551	9.5	9.3	8.6	8.2	7.3	7.1
あきたこまち	553	6.0	5.4	4.9	4.6	4.1	3.9
*ヒメノモチ	525	2.4	2.4	2.3	1.9	1.8	1.8
単収試算値の対前年差(kg)					1.1	1.1	0.2

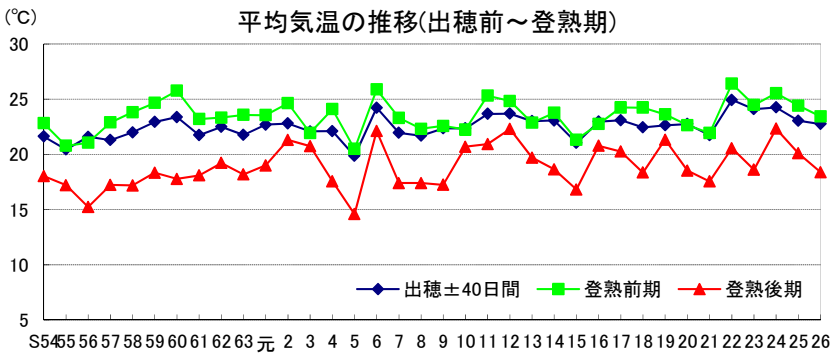
※1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 平成27年産見込は農業団体等の情報から推計した。

2 気象と収量構成要素の推移

近年は、登熟期間の平均気温が高めに推移している。

また、収量構成要素をみると、近年、もみ数は減少傾向にあるものの、登熟(千もみ当たり収量)はおおむね安定傾向にある。

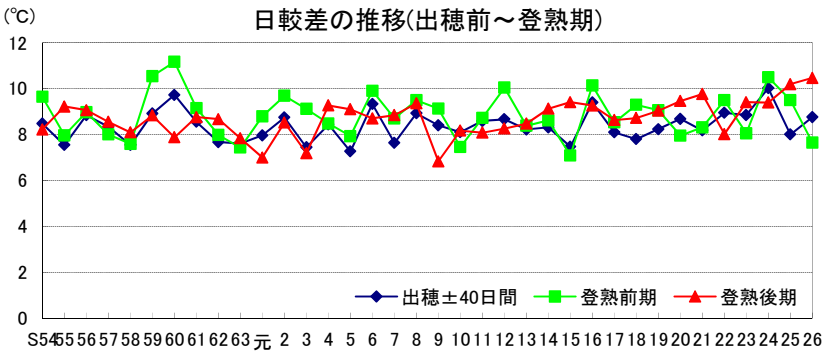
＜平均気温、もみ数及び登熟の推移＞



＜最近の作柄（平成20年産以降）＞

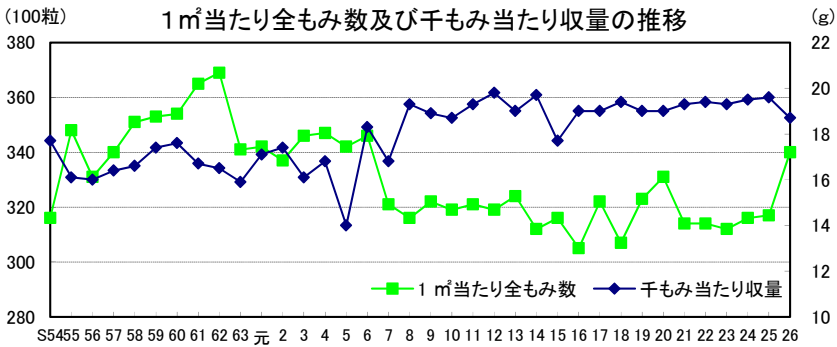
年次	全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)
20	○	—	○	104
21	—	—	—	100
22	—	○	—	100
23	—	—	—	99
24	—	○	—	102
25	—	○	—	102
26	◎	×	○	105

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み
×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）
ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み
×：やや多い ××：多い



3 収量水準の動向

収量水準の高い「つや姫」の作付面積割合が上昇していることから、収量水準は上昇傾向にある。



＜作柄表示地帯別作付面積割合の動向等＞

作柄表示地帯	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H22	23	24	25	26	27 (見込)
中通り	536	51.0	56.3	56.5	56.7	55.9	56.5
浜通り	513	21.2	9.2	9.2	9.9	10.1	10.1
会 津	599	27.8	34.5	34.3	33.4	34.0	33.4
22年産作付面積との差(ha)		0	△ 16,200	△ 14,400	△ 12,400	△ 12,400	△ 12,400
単収試算値の対前年差(kg)			7.0	△ 0.1	△ 0.7	0.3	△ 0.4

＜品種別作付面積割合の動向＞

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H22	23	24	25	26	27 (見込)
コシヒカリ	547	61.7	62.4	63.9	62.2	61.0	59.2
ひとめぼれ	571	26.5	25.2	23.9	23.1	22.7	22.5
あきたこまち	590	3.2	2.5	2.5	2.3	2.1	2.0
チヨニシキ	554	3.5	3.9	3.1	2.9	2.9	2.6
*こがねもち	488	2.9	2.8	2.7	2.2	2.2	2.2
天のつぶ	580			1.3	3.3	5.8	7.9
単収試算値の対前年差(kg)			△ 0.5	0.1	0.8	0.6	0.6

※1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 平成27年産見込は農業団体等の情報から推計した。

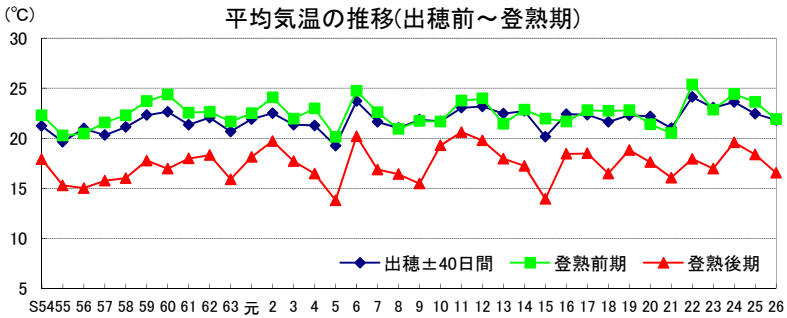
○ これまでの平年収量等について

平成23年の東日本大震災等の影響で水稻の作付面積は大幅に減少し、特に、被害が大きかった「浜通り」については、土地の復旧作業の遅れ等により、作付けが回復せず、平成22年に比べ、平成26年では約1万ha減少している。

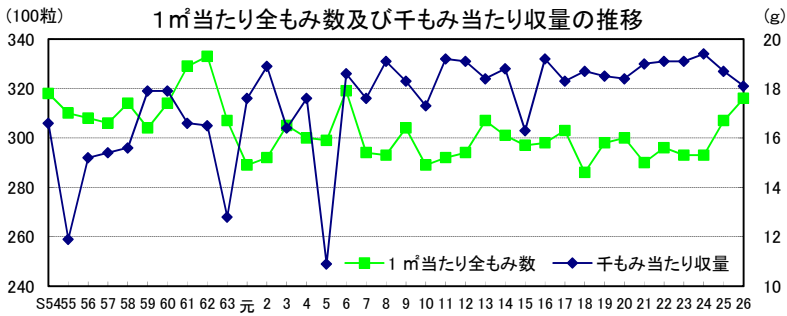
これまで、平成24年産以降、作付面積の増減が一定程度安定するまで平年収量は据置きとしたが、単収水準の低い「浜通り」については平成27年産も増加する見込みが少ないことから、本年産は据置きしないこととした。

＜平均気温、もみ数及び登熟等の推移＞

平均気温の推移(出穂前～登熟期)



1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



＜最近の作柄（平成20年産以降）＞

年次	全もみ数	登熟	被害	（作最況終指）数
20	—	—	—	100
21	×	○	○	101
22	—	○	○	103
23	—	○	○	102
24	—	○	○	104
25	○	—	○	104
26	◎	×	○	104

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み
×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）
ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み
×：やや多い ××：多い

1 品種構成の動向

「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」を中心とした品種構成であるが、近年、「天のつぶ」が増加傾向にある。

2 気象と収量構成要素の推移

近年は、登熟期間の平均気温が高めに推移している。

なお、収量構成要素をみると、近年、もみ数は減少傾向で、登熟（千もみ当たり収量）は高めで安定している。

3 収量水準の動向

「コシヒカリ」より、収量水準の高い「天のつぶ」が増加傾向にあることに加えて、収量水準の低い浜通り地帯の作付面積割合が減少していることから、収量水準は上昇傾向にある。

茨 城 県

1 品種構成の動向

主力品種の「コシヒカリ」が減少する一方で「あきたこまち」等が増加するとともに、近年、より収量水準の高い「ふくまる」「あさひの夢」等も導入されている。

＜品種別作付面積割合の動向＞

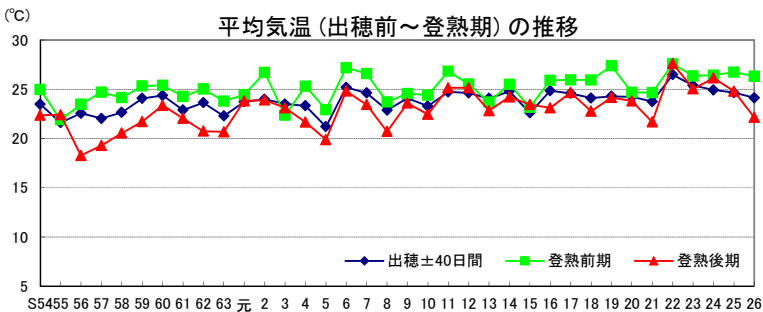
主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H22	23	24	25	26	27 (見込)
コシヒカリ	541	76.5	76.4	76.6	76.4	75.2	74.2
あきたこまち	556	11.0	11.1	11.2	11.9	11.7	11.7
ゆめひたち	570	3.8	3.4	3.6	2.9	3.7	3.7
キヌヒカリ	575	1.5	1.3	1.2	1.0	0.9	0.9
ひとめぼれ	535	1.3	1.2	1.1	0.9	1.0	1.0
ふくまる	597				0.8	1.2	2.0
あさひの夢等	604	0.6	0.6	0.6	0.6	1.0	1.1
単収試算値の対前年差(kg)					0.7	1.2	1.0

※ 1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 平成27年産見込は農業団体等の情報から推計した。

2 気象と収量構成要素の推移

近年は、登熟期間の平均気温が高めに推移している。
また、収量構成要素をみると、近年、もみ数が抑えられる傾向にあるなか、登熟（千もみ当たり収量）は安定しつつ、上昇傾向にある。

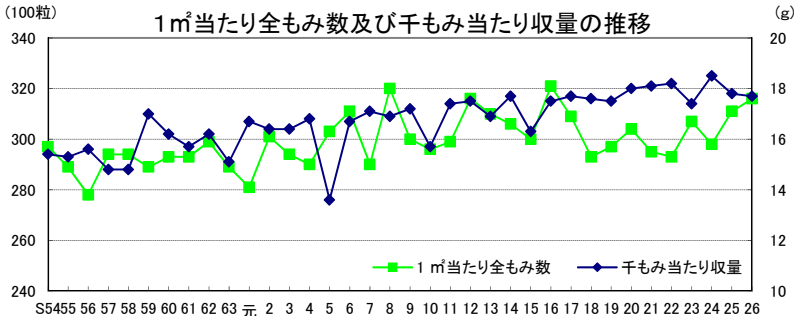
＜平均気温、もみ数及び登熟の推移＞



＜最近の作柄（平成20年産以降）＞

年次	全もみ数	登熟	被害	（作況最終指数）
20	—	○	○	103
21	×	○	—	100
22	×	○	—	100
23	○	×	—	100
24	—	○	○	103
25	○	—	○	104
26	◎	—	○	105

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み
×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）
ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み
×：やや多い ××：多い



4 収量水準の動向

「コシヒカリ」の作付面積が減少し、収量水準の高い「ふくまる」や「あさひの夢」等の作付面積割合が増加していることから収量水準は上昇傾向にある。

1 品種構成の動向

「夢しずく」、「ヒヨクモチ」、「ヒノヒカリ」及び「さがびより」を中心とする品種構成となっているが、「夢しずく」及び「さがびより」の作付面積割合が増加傾向にある。

2 栽培技術等の動向

良食味米生産等推進のため、生育ステージに応じた施肥管理、水管理（適正な中干しの実施、早期落水の防止）等の指導が行われているが、省力化として基肥一発肥料の利用が中晩生品種で増加している。

なお、水稻の後作への準備のため早期落水の傾向がみられる。

3 気象と収量構成要素の推移

近年は、出穂前後40日間の平均気温が上昇傾向となっている。

なお、収量構成要素をみると、「ヒヨクモチ」の10 a 当たり玄米重が減少傾向となっている。

＜最近の作柄（平成20年産以降）＞

年次	全もみ数	登熟	被害	（作況最終指数）
20	×	—	—	98
21	×	○	—	100
22	×	×	×	94
23	—	—	—	101
24	×	—	×	97
25	—	×	×	93
26	×	—	×	92

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み
×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）
ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み
×：やや多い ××：多い

4 収量水準の動向

収量水準の高い「ヒヨクモチ」の作付面積割合が減少していることに加え、省力化のため利用が増えている基肥一発肥料の効果が適切な時期に十分に発揮されないことや、水稻の後作への準備のため早期落水による登熟への影響により、収量水準は低下傾向にある。

＜品種別作付面積割合の動向＞

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H22	23	24	25	26	27 (見込)
夢しずく	482	22.9	23.0	22.0	23.1	22.9	23.8
*ヒヨクモチ	553	24.7	25.0	24.6	23.3	20.8	21.1
ヒノヒカリ	502	19.8	20.3	20.5	20.0	22.9	20.1
さがびより	517	15.5	16.3	17.1	19.1	19.4	20.4
コシヒカリ	428	8.2	8.2	8.4	8.0	7.8	8.2
たんぼの夢	553	3.9	3.0	3.3	3.1	3.0	2.9
単収試算値の対前年差(kg)		△ 0.5		△ 1.1		△ 0.2	

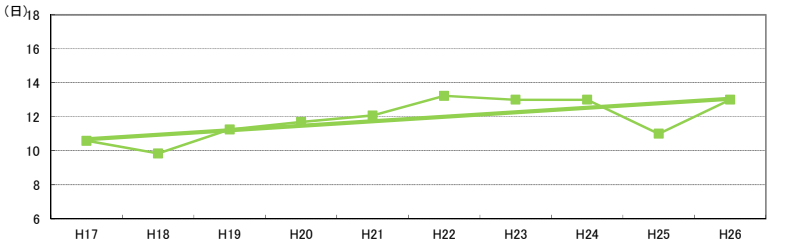
※ 1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 平成27年産見込は農業団体等の情報から推計した。

基肥一発肥料の利用割合

	H20	21	22	23	24	25	26
中生品種	33.6	35.0	37.5	40.6	39.2	45.9	47.9
晩生品種(ヒヨクモチ)	48.7	49.8	48.0	50.5	51.0	55.4	59.3

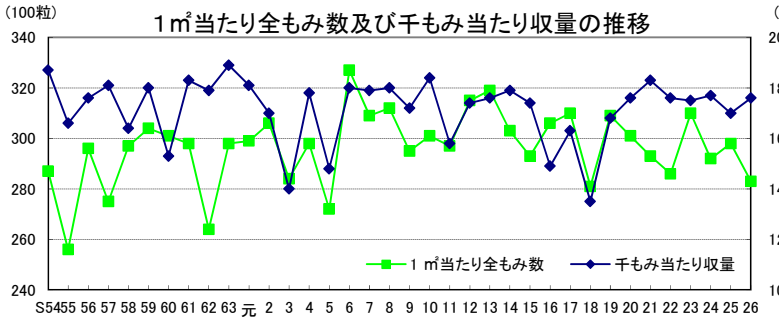
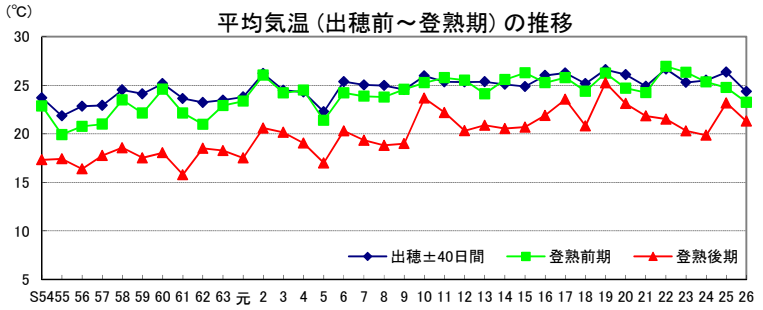
※ 1. 関係機関等の資料により推計した。
2. 中生品種とはヒノヒカリ、たんぼの夢及び天使の詩である。

落水日から刈取日の状況（全品種）

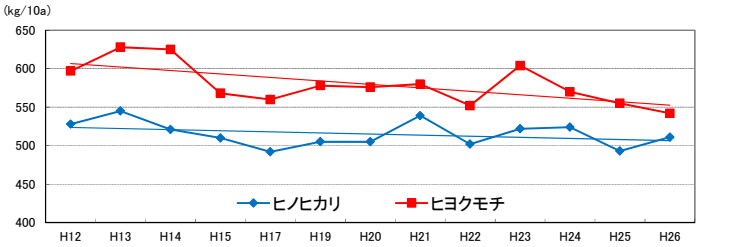


※ 水稻作況調査結果及び農家への聞き取りにより作成した。

＜平均気温、もみ数及び登熟等の推移＞



ヒノヒカリ及びヒヨクモチの10a当たり玄米重の推移



※ 作況指数100から10ポイント以上差のある年次を除外している。

長 崎 県

1 品種構成の動向

「ヒノヒカリ」、「コシヒカリ」が減少するなか、収量水準の高い「にこまる」、「つや姫」が増加する傾向にある。

特に近年、対馬・壱岐作柄地帯では大幅に増加する傾向にある。

2 栽培技術等の動向

品質に加え、食味に重点を置いた栽培指導(適切な肥培管理等)、気候の変動に対応するための遅植え等の指導が行われている。

3 気象と収量構成要素の推移及び近年の作柄

近年は、登熟後期の最低気温が低下傾向に伴い、日較差も上昇傾向にある。

また、収量構成要素をみると、近年、もみ数は年次間で振れがあるものの、登熟(千もみ当たり収量)はおおむね安定している。

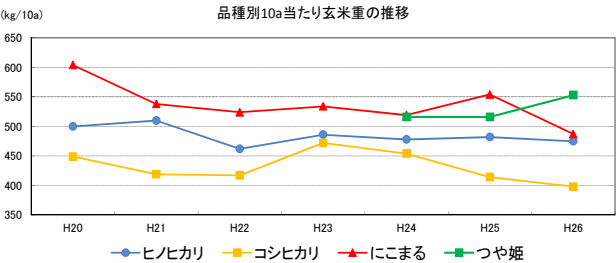
＜最近の作柄（平成20年産以降）＞

年次	全もみ数	登熟	被害	（作最況終指）数
20	○	—	—	101
21	×	○	—	101
22	××	○	××	94
23	—	—	○	102
24	—	×	×	98
25	—	×	×	98
26	×	—	×	97

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平均並み
×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）
ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平均並み
×：やや多い ××：多い

4 収量水準の動向

「ヒノヒカリ」、「コシヒカリ」に比べ収量水準の高い「にこまる」、「つや姫」の作付面積割合が上昇していることから、収量水準は上昇傾向にある。



＜品種別作付面積割合の動向＞

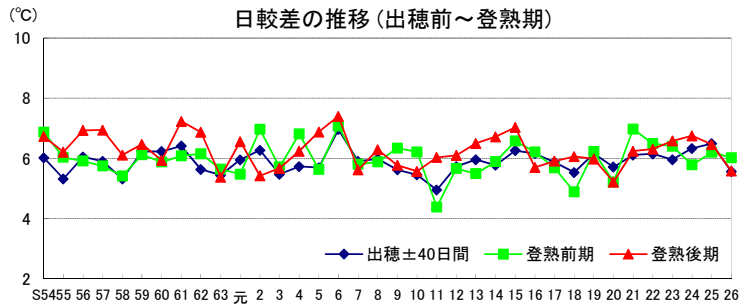
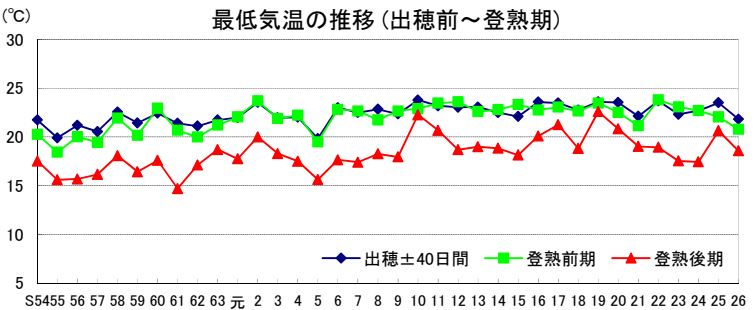
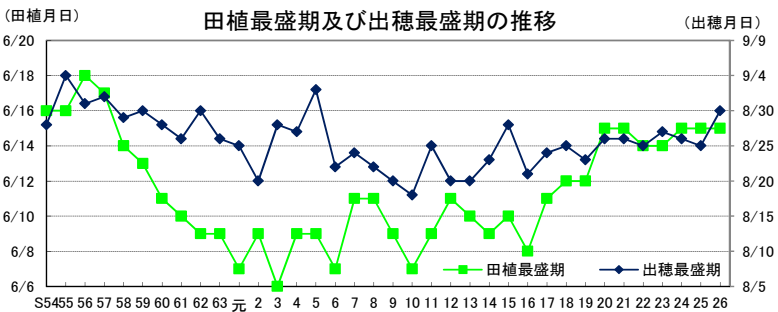
主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H22	23	24	25	26	27 (見込)
ヒノヒカリ	484	66.0	64.3	62.4	61.1	60.2	60.0
コシヒカリ	431	15.0	14.3	13.5	12.7	12.3	12.0
にこまる	534	12.7	16.1	18.1	19.3	19.8	20.0
つや姫	528			0.8	1.7	2.1	2.2
単収試算値の対前年差(kg)					1.5	0.7	0.3

※1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 平成27年産見込は農業団体等の情報から推計した。

（対馬・壱岐）

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H22	23	24	25	26	27 (見込)
コシヒカリ	476	40.2	37.6	32.5	26.9	25.3	25.0
ヒノヒカリ	483	29.7	24.4	21.7	21.3	22.0	22.0
あさひの夢	437	2.6	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1
にこまる	525	22.6	32.2	34.5	34.5	31.9	31.9
つや姫	571			6.0	11.1	15.0	15.5
単収試算値の対前年差(kg)			5.7	7.0	5.4	2.5	0.4

＜栽培技術等の動向＞



＜もみ数及び登熟の推移＞

